



# 天長節 磐城時報

編輯 磐城石城郡平町新屋町十四  
印刷 磐城石城郡平町新屋町十四  
發行 磐城石城郡平町新屋町十四  
電話 磐城石城郡平町新屋町十四  
一、部金貳拾一元、月金拾元、半年拾元、一年拾元、廣告料一行十四字、日金五元、日刊(日曜、祭日)休刊

## 聖德讚仰記

四月廿九日は、今上陛下御登極後第一回天長節であります。本来ならば、國を擧げて盛んに奉祝せねばならぬのですが、何を申すも、多摩御陵のほとり土の濕り猶乾かず、世は諒闇の裡に在る關係上、宮中の鋪宴を始め、各學校團體等も祝賀の式を取り止り、只上下謹んで、聖壽の無窮、御代の萬歳を熱禱し奉る次第であります。



恭しく惟みるに、陛下には天資御英明、また儲位にたはします頃、内外の政務を御攝行海なす深き、山なす高き御仁慈を以て我れ、國民を御愛撫あらせられ、客臘二十五日先帝の御登極と共に九五の御位に即かせ給ひ、昭和の御代の新たなる光は、煥然と世界の上に輝き、國運彌更に隆昌の域に進みつゝあること、誠に喜びの中の喜び、これに過ぐるものはありません。

陛下の御乾徳の顯はれたる御逸事は、數々あらせられますが、中に就き、今度の天長節にふさはしき御話を洩れ承るまゝに記し奉ることにしませう。それは去る大正十年、陛下が東宮の御資格を以て、波路香けき歐洲へ御渡航、英佛等の先進國を御歴訪あり、具さに彼の地の文物制度人情風俗をみそなはされて、御恙もなく御歸朝あらせられた時のことであり、何しろ前古未曾有とも申上ぐべき御盛事のこと、國民はいづれも熱狂的に御歡迎の

誠意を捧げました、殊に地元東京市民の如きは、各團體より成る盛大な提燈行列を行ひ、火の海人の流は、續々と東宮御所へ雪崩れ込みました。當夜陛下には、わざ、バルコニーに立ち出で、せられ、御氣色最も麗はしく、それ等の行列に、一々御會釋御答禮を賜はりました、が暫く経つてもう行列もあらかた終つたらしい様子に、御奥へ入らせられ、御湯浴みをあそばすため、御召物、洋服、を御脱ぎ捨てになり、近侍の者が、又々數百人の團體が参入いたしました。と申上げに、來ましたので、陛下には、たゞ、さうか、では、入浴は後にしやう。余一人のため、多數の市民を待たせるに、忍びないから、

## 拜察するに懼れ多い 最近の 聖上陛下 寸暇を惜しませられ國務に御精勵

茲に明治、大正の御代をつがせられた、今上陛下第一次の天長節を迎ふ。時恰かも諒闇中に屬し、宮中の御儀はしたる拜賀、参賀御祝宴並觀兵式等は、全然御止めになり、一木宮相、珍田太夫、御祝詞を奏上する程度を拜承するが、聖上陛下には、未だ東宮にたはします、頃より既に攝政の高き地位に就かせられ、而も廣大無邊の御仁慈を以て我等國民を御愛撫あらせ給ひし、思へば、昭和新政の下に恩露に霑ふ吾々國民は、聖上御即位第一次の天長節を迎ひ赤誠を傾けて、靈壽の無窮を祈り奉る處なければならぬ。

### 聖上陛下 御略歴

御名裕仁、明治三十四年四月二十九日御誕生、延宮と申し奉つた。同四十一年四月御年八歳で學習院に御入學、大正三年四月初等科御卒業、爾後東宮御所内東宮御學問所にて御修學、同年九月陸海軍少尉に御任官、近衛歩兵第一聯隊兼第一艦隊附に御昇進、五年十月三十一日陸海軍歩兵大尉に御昇進、同年十一月三日立太子禮御舉行、同八年六月十日久邇宮良子女王殿下と御婚約あらせらる、同九年十月三十一日陸海軍少佐に御昇進、同十年三月三日歐洲御見學御發程、英、佛、白、蘭、伊等各國御歴訪、同年九月三日御歸朝、同年十一月二十五日攝政御就任、同十二年十月三十一日陸海軍中佐に御昇進、同十三年一月二十六日御結婚、十四年十月陸海軍大佐に御昇進遊ばされ、十五年十二月二十五日先帝御崩御と同時に皇位御繼承遊ばさる。

# 謹 而 天 長 節 を 迎 ふ

山崎與三郎	白井一郎	中野甲藏	諸橋久太郎	高岡唯一郎	井上茂作
石城郡銀行組合 磐城銀行 磐城越銀 磐城實業銀行 磐城東銀 四倉倉庫銀行 第七十七銀行平支店 第七十七銀行平支店 農工銀行平支店 常磐銀行植田出張所	四倉銀行會社組合 株式會社四倉銀行 四倉電氣株式會社 萬年瓦工業株式會社 四倉運送株式會社 磐城銀行四倉出張所 磐城セメント株式會社	東部電力株式會社 平營業所	平製氷株式會社		
山崎合名會社	入山探炭株式會社 坑務所	磐城炭礦株式會社 礦業所	小田炭礦株式會社	堀江工業株式會社	植田水力電氣株式會社 磐城水產工業株式會社
湯本信用無盡株式會社	平木炭株式會社	平藝妓屋組合	磐城海岸軌道株式會社	磐城建物株式會社	釜屋商店 平運輸株式會社